

重城 康二

東京から沖縄に着任してから八カ月が経った。その間、「あれは何ですか」「どうしてそうなのですか」など、子供のようになににでも聞いていたから、多くの人に迷惑をかけ続けたと思う。本土人の身勝手かもしれないが、沖縄には変わってほしくないな、と思うものがたくさんある。全国横並びも必要だろうが、同時に希少性、特異性も大事にしてほしい。無形文化財とまではいかない些細なことで、それは今や価値のある「資源」なのだから。

門中墓

沖縄ならどこでも市街地をちろちろと外れると、本土では見慣れない物にぶつかる。亀甲墓というらしいが、そう言えば、亀がうつ伏せになっている姿に見える。もう一つは、家の形をした屋敷墓。(写真＝名護市フセナテラスリゾート近くの国道五八号線沿いで)

どちらもお墓と聞いて二つの疑問が浮かび上がった。一つは、お寺や墓地・霊園でもない所になぜ、墓があるのか。もう一つは、なぜあんなに大きいのか。である。

沖縄には本土とは違う独自の葬送・祖霊儀礼がある。先祖の供養はお盆と清明祭の二回。葬式は普通、仏教



残しておきたい 沖縄の不思議

です。ようだが、宗派はこだわらないらしい。琉球王家の尚家は禅宗だったようだ。普通の人には聞くと宗派はない知らない。と答える。「そうか。ここには檀家制度がないんだ。だから、めっちゃ高い戒名なんてのはつけないでもないんだ」「そういえば、祖霊と仏教は元々は関係ない」「本土では戦後に、なんとか条令」ができて、お墓はお寺が共同墓地に移してしまっただが、沖縄は昔のお墓はそのままでいいんだ。」

きれいな砂浜

「この間、波の上ビーチに行きました。きれいな砂浜で驚きました」と沖縄の人に言ったら、「もうときれいな海岸は他にもありますよ。特に離島へ行けば」と笑われてしまった。ほんとうにそうだった。人工海浜らしいホテルのビーチでも、本土に比べれば、格段のきれいだ。沖縄の人は知らないだろうが、本土の砂浜、有名な湘南海岸でも砂浜は汚い。最近「ミ」は拾うようになつたし、砂も入れるようになってるようだ。今でもあそこく一メートルも掘れば、硫黄の

匂いがする。真っ黒な泥が出てくると思う。戦後の高度成長が、砂浜をめちゃくちゃにしたし、昔、泳いだ東京湾の海水浴場は八〇年代に埋め立てられてしまった。

沖縄の人は色は白いし、泳げない？

沖縄には上げ底ブーツはいるが、「ガ」ン黒の女の子は見かけない。統計をとったわけではないが、泳げない人が結構多いらしい。理由を聞くと、「学校にプールがなかったから」という返事だ。「臨海水泳教室はなかったの。(本土ではプールがなくても)小学校では海辺の学校に泊まって、海で先生に無理やり泳がされるんだよ」と聞くと、「海では泳がない」という返事が返ってきた。驚いた。そう聞いて小学校三、四年ごろ、ひと夏だけ、同じクラスになった金城(きよこ)さんという沖縄の女の子も泳げなかったのを思い出した。

停留所以外でもバスは止まる!!

六月ごろ、北谷野球場の取材の帰り、産経新聞の支局長と近くの五八号線から那覇に戻ろうとした時、バスが停留所を過ぎて信号で止まっていた。タクシーは近くにいない。彼が手を挙げた。「何をしているのか」と思ったら、バスのドアが開いた。「沖縄のバスは停留所以外でも乗せてくれるし、降りてくれますよ」と聞いて驚いた。

名護西線のバスに乗って、恩納村のXXホテルに行きますか」と運転手さんに聞くと、「バス停から遠いから近くで降りましょうね」との返事。バス停とバス停の間の五八号線沿いのホテルの前で止めてくれた。

自慢じゃないが、バス路線は八割方乗っているから、これは間違いないと思う。「しましうね」

「お昼に行きましょうね」と言われるとまだ、まだ戸惑ってしまっ。「一緒に行きましょう」と誘ってくれたとは思ってしまっからだ。沖縄ではそうではなく、「行きますが、いいですか」という意味だ。本土なら、行きますね。確かに文法的にはどこにも、「一緒に」を示す言葉は入っていないが、本土ではどういつ訳か、「一緒に」という意味になっている。それが普通だと思っていたが、この項目は本土の不思議にすべきかもしれない。

